

古代インドにおける哲学と文献学

中谷 英明

この小稿は、インドにおいて現存する最古の文献『リグ・ヴェーダ』(紀元前12世紀編纂)から、原始仏教聖典(紀元前4~1世紀ころ)に至るインド古代の哲学的思惟の変遷をたどりつつ、その哲学と、それに付随して制作された文献群との関係を粗描する。

古代インドの思惟の中心概念の一つとして、人間の「思い」、「意欲」、「欲望」などと表現される人間精神の情的、意的側面がある。これを巡る議論の跡をたどりつつ思想変遷の一端を明らかにし、それに応じる形で文献群が編纂された状況を略述したい。

1 『リグ・ヴェーダ』

1万余句からなる宗教歌集『リグ・ヴェーダ』は、中央アジアの遊牧民であったアーリヤ人が、イランに入ってきた人々とたもとを分かってインドに侵入した紀元前18世紀ころにまで遡る歌詠を含み、紀元前12世紀ころ、現形に編纂された。

これらの讃歌は、祭主の祈願(長寿・財産増殖・男子誕生等のこの世における繁栄と、死後の生天による安楽)を成就するため、祭儀において祭官によって唱えられた。神々を祭場に招請し、その事績を誉めたたえつつ、祭主の供物と祈願が嘉納されることを願っている。

人間や世界に関する哲学的考察の萌芽は、すでに『リグ・ヴェーダ』の新層に見える。「非存在はなかったの歌」と呼ばれる有名な宇宙創造歌(10.129)は、「ひとつのもの」から、「思い」、「意欲」、「男の力と女の力」を経て「現象界」が出現するさまを、次のように詠んでいる。

そのとき、非存在はなかった。存在もなかった。
虚空も、その上の蒼穹もなかった。
何が蠢動していたか。何処に。何に護られて。測ることのできない深い水があったのか。(1)

そのとき(人間の)死も、(神々の)不死もなかった。夜と昼の標もなかった。

「ひとつのもの」が自らの勢いで、息もなく呼吸していた。これ以外に何もなかった。(2)

初め、闇は闇によって覆われていた。このすべては、標のない波であった。

そのとき、空虚に包まれた、潜勢力である「ひとつのもの」が、熱によって生まれたのである。(3)

それから(「思い」が生じ)、「思い」からその最初の種子である「欲望」が現れた。

詩人たちは心のうちで探し求め、考察して、非存在の中に、存在と繋がるものを見つけた。(4)

かれら(詩人)の縄は水平に伸びていた。(それより)上に何が、(それより)下に何があったのか。

種子の供与者があった。力があつた。おのずから発する勢いが下に、供与者が上にあつた。(5)

この創造が何から生じ、何から来たかを、誰があきらかに知り、誰がここで語ったか。

神々は創造より後に生まれた。誰がこれが何から生じたかを知ったのか。(6)

この創造は何から生じたか、定められてあつたか、そうでなかったか、

これを蒼穹の最高処から見下ろしていたものが、まさにこれを知っていた。あるいは彼も知らなかったのか。(7)

この後、紀元前12世紀から10世紀にかけて、『リグ・ヴェーダ』の祈願文的側面を発展させた呪術句集『アタルヴァ・ヴェーダ』が編纂され、また種々の祭祀執行のため、主として『リグ・ヴェーダ』の詩句を再編しつつ『ヤジュル・ヴェーダ』、『サーマ・ヴェーダ』が編まれ、こうして4ヴェーダが成立した。『ヤジュル・ヴェーダ』はインド最古の散文を含む文献として注目される。

2 ブラーフマナ

4ヴェーダに対する散文注釈文献として、紀元前9世紀ころから成立し始めたブラーフマナ文献は、祭祀における祭官の所作および祭具の「規定」と、各ヴェーダの個々の語句や讃歌の意味および祭祀の起源などについての「説明」から成る。この後者の部分に、(1)文献学

的知識の集成の開始や、(2) 哲学的考察の進展が見られ、ここに学問の第1段階が認められよう。

祭祀に関する考察が進展し、一方では、祭官にたいして完璧な祭祀の施行が求められた結果、そのためのマニュアルとも言うべき文献学的知識が次第に集積されてゆく。これが数世紀後には、「ヴェーダ補助学」として確立される。

他方、祭祀に関する考察はまた、祭祀の主催者である祭主の役割の考慮にも至りついている。『シャタパタ・ブラーフマナ』においてシャーンディリヤが説く次の一節は、初めて祭主の「意欲」を、祭祀による生天の要件として掲げたものである。

…人間は意欲から成る。人はどれほどの意欲を持ってこの世から去るかに従い、死後、それだけの意欲を持ってあの世に至る。そのようなものとして「自己」(アートマン)を大切にすることがよい。(「自己」は、) 思いから成り、呼吸を本体とし、輝きを形姿とし、虚空を本性とし、望みのままに姿をとり、思いに等しい速さをもち、実現する構想力をもち、… …。 ……その「自己」の中に、黄金から成る男がいる。彼は、天に勝り、虚空に勝り、大地に勝り、すべての存在物に勝っている。……この男が私の「自己」である。「この世を去ったのち、私はこの「自己」に合一するのである」という確信がその人であり、疑いがないならば、……それはそのようになる。(10 6 3)

また別の文献では、いったん天界に再生を果たしたとしても、自己に関する確信を持たない者は一定期間後に「再死」することになると言われ(『ジャイミニヤ・ブラーフマナ』1)、上記シャーンディリヤ説と合わせれば、ウパニシャッド期に確立する業報輪廻思想の直前段階まで来ていることがわかる。

この期における統一的創造原理の探求は種々に展開されるが、新しく光が当てられたのは「生物主」(ブラジャーパティ)と呼ばれる神であり、この神が多となろうと欲して「苦行」(『リグ・ヴェーダ』10.129.3の「熱」と同語)を行い、「梵」(ブラフマン=成長力)を生み、これが万有の起源となったという。また個々の祭式の構造的意味を確定するため、個人的事象(息、心、声など)と宇宙的事象(空間、太陽、火など)の機能対応による同一視を多岐にわたって認定することも始まった。

3 ウパニシャッド

哲学的傾向は、ブラーフマナ以降、アールニヤカと呼ばれる同種の注釈文献を経てさらに強まり、紀元前5、6世紀ころに出現した古層ウパニシャッドにおいて一つの頂点を画する。祭祀における祭主のあり方がブラーフマナ期より格段に明確に問われ、「業」(行為、カルマン)という新概念が、この世とあの世における人の境遇を決定する潜在力として想定されるに至る。人はこの世で積んだ善業の量だけ天界での幸せを享受し、善業の効力が尽きるとこの世に回帰する。悪行の場合にも、その力が尽きるまで地獄等の悲惨な境遇を味わうことになる。こうして、種々の境遇を巡りつつ生死を繰り返す「輪廻」という新概念も同時に成立した。『プリハッドアールニヤカ・ウパニシャッド』の第4章4節5～7では、このことが次のように述べられる。

人は欲望からなるものと言われる。人の欲望に応じ、人の意欲はつくられる。意欲に応じ、行為はなされる。行為に応じ、その人が定まるのである。

これについてこの詩句がある。

「人の表徴である思いが^{しるし}つなぎとめられているところ、そこ(天界)へ、行為の結果とともに、欲望ある人は行く。」

「人がこの世でなしたあらゆる行為、その行為の結果が尽きたとき、その人はあの世から再びこの世へと、行為を積むために帰ってくる。」

これが欲望を持つ人のばあいである。他方、欲望がなく、欲望を離れ、欲望を満たし、自己を愛する、欲望を持っていない人の場合は、……この詩句がある。

「心臓に存在するもろもろの欲望のすべてから開放されるとき、死すべき者は、不死となる。この世でブラフマンに到達する。」

もともと天界にあり、死後に参入が許されたブラフマン世界が地上に引き降ろされ、この世において人はその世界に入り、不死となるとされたことは、大きな転換である。この転換をもたらしたものは、祭主の資質に関する考察に他ならない。こうして本来社会的機能の側面の強かった祭祀が、個人化、内面化されることになった。ここにいたれば原始仏教との乖離は、用語の違い(仏教はブラフマン(梵)、アートマン(我)という2原理を放棄し、これをダルマ(法)などの語で置き換えた)を除けば、ほとんど祭式執行を維持するか否かの一点であると言えよう。

4 原始仏教

『スッタニパータ』は5章から成る現存最古の仏典であるが、そのなかでも後半2章は、言語、韻律、語形、語彙、内容などについて、前半3章と截然と区別され、格段に古い。例えば「仏陀」、「比丘」という語は、後半では複数形で出ることがない。また韻律形式においても、後半部は最新層ブラーフマナと前半部の中間に位置する。おそらくこの部分は、仏教教団が大規模に組織化されるアショーカ王治下（紀元前3世紀中葉）以前の伝承であると考えられる。以下、この後半2章の要旨を見る。

先に見たブラーフマナにおいては、人間は「意欲」（kratu）から成ると言われ、ウパニシャッドにおいては「欲望」（kāma）から成ると言われていた。ブラーフマナにおける「意欲」は、天界再生に必須の確信と考えられていたのであったが、ウパニシャッドにおける「欲望」は、同じく天界再生の契機とされながら、それを持たない人がブラフマン世界に入るとされ、扱われ方が逆転している。

ただし『プリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』においては、「欲望のない人」は「すでに欲望を満たした人」とも言われ、「欲望充足」そのものがブラフマン世界参入の妨げとは考えられていない。

『スッタニパータ』は、この点に関してさらに厳しく、欲望そのものの放擲をすすめる。

「人は洞窟（＝心臓＝欲望）に繋がれ、多くのもの（欲望の対象）に囲まれ、迷妄に溺れている。このような人は孤独（の平安）からはほど遠い。諸々の欲望はこの世においてけっして捨て易いものではない。」（772）

そのような人には苦しみがつきまとう。

田畑、家屋、黄金、牛馬、召し使、女性、親族といった種々の欲望の対象に執着する人、その人を無力な諸々のものが支配する。危難が押しつぶす。さらにその人を苦しみが追い回す。破れ舟を水が追いかけるように。（769 770）

しかし欲望に囚われた人が事実を自覚することは難しい。

快樂に溺れ、欲望に魅入られた人が、自分の見方をどうして越えることができよう。自ら思い込みを作り上げつつ、思い込んだ通りに主張するのである。（781）

このような欲望からの解放は、無一物での修行生活によってしか実現されない。それは善・悪の行為を越えたものでなければならない。善・悪の行為は「業」を積み増すのみで輪廻からの解放、平安をもたらすことがないからである。

「我がもの」に拘泥し、もがいている人たちを見なさい。流れがと絶え、水が枯れようとするところにいる魚のように。これを見て「我がもの無し」で遊行しなさい。諸々の生存に欲望を生じることなしに。（777）

あらゆる戒律を、またこの善と悪の行為を棄て、これは浄らかこれは不浄と区別することなく、平安を得るために、欲望なく修行しなさい。（900）

こうして原始仏教は、人間の最上の生き方として孤独な山林における修行生活を選んだ。それはバラモンの祭祀を捨てることを意味した。祭祀を信じるかぎり、人は何らかの欲望から自由ではあり得ないことが、次のように言われている。

彼らは願い事を宜べ、讃歌を唱え、祈願を唱え、献供を行う。自利のために祈願を唱え、祭祀を熱心に行い、よい境遇を得たいという望みに縛られている彼らは、生と死から解放されたことはないとは私は明言する。（1046）

以上において、紀元前12世紀の『リグ・ヴェーダ』中の哲学的考察の萌芽から、仏教の出現に至る思潮を、ごく大まかにあとづけた。最初期から人の思いが重視され、やがてそれが天上のブラフマン世界への再生に必要なものとされ、次にブラフマン世界の地上への降下とともにむしろ不必要なものとなり、さらに祭祀を否定し、修行を重んじる仏教によっては棄却されるべきものとなった。この流れは、宗教の社会的在り方から個人的、内面的あり方への変遷と捉えることもできよう。

5 バラモン教聖典とヴェーダ補助学

以上に述べた『リグ・ヴェーダ』を嚆矢とする4ヴェーダとその注釈文献（ブラーフマナ、アーラニヤカ、ウパニシャッド）は、聖仙が神から直接啓示を受けた聖典として「天啓聖典」（シュルティ）と称され、聖仙の学説である「伝承聖典」（スムリティ）と区別される。

天啓聖典がほぼ形を整えた頃、伝承聖典も次々に編纂

された。それらは古くは「スートラ」と呼ばれる暗記の便をはかった極めて簡略な散文体で著され、祭祀を記述する「シュラウタ」、「グリヒヤ」を始め、生活規定である「ダルマ」などのスートラが制作された。これらは合わせて祭事経と呼ばれ、次に述べるヴェーダ補助学の一分野を形成している。

ブラーフマナに端を発した文献学的領域は、紀元前5, 6世紀以降、「ヴェーダ補助学」と称される6種の文献群へと整理されていった。それらは、(1)音韻論、(2)韻律論、(3)文法学、(4)語源論、(5)天文学、(6)祭式学である。また「総目録(アヌクラマニー)も編纂された。

これら膨大な文献群は讃歌の口頭伝承に正確を期そうとする強い意志のもとに集成され、精密さにおいて近代文献学に比肩しうものがある。ことに紀元前500年ころ北西インドに出た文法学者パーニニは、過去の文法学者の説をふまえ、また東インドの異説まで引用するという広い視野を持ち、インド・アーリヤ語を韻文と散文に分かって詳細に分析しつつ、文法を体系的に記述した。それは「かつて存在した最も完璧な記述文法」と言われる。

6 原始仏教聖典の編纂

祭祀を捨て、孤独な修行行脚の生活を理想とした仏教も、アショーカ王治下に保護され、しだいに教団としての体裁を整えつつ全インドに流布していったと考えられる。大教団を維持するためには、仏陀の言行録(経)の編纂を行い、また教団内の生活規定(律)を整える必要が生じた。さらに言行録の中に散在する仏陀の教説を整理・体系化し、それに対する詳細な注釈も編纂されていた(論)。

こうして紀元前1世紀ころには、経、律、論から成る「三蔵」が成立した。

7 古代インドにおける聖典とその周辺文献の編纂： まとめ

以上が紀元前12世紀から紀元前1, 2世紀頃までの文献のあらましである。ただし叙事詩『マハーバーラタ』には触れなかった。これは新しい思想潮流に属し、その記述は別稿に譲る。

バラモン教は『リグ・ヴェーダ』を出発点とし、次々と注釈と諸種の補助文献を制作し、一大文献群を持つに

いたった。

他方、ヴェーダの祭祀思想を個人化、内面化した先に成立した仏教は、祭祀を認めず、祭祀文献は一切継承しなかった(ただし後代、密教は祭祀を取り込むが、本稿の扱う範囲を越える)。仏教は早くに祭祀に代えて集団的修行生活を組織化することに成功し、そのための教団規定(律蔵)を整備した。また哲学的思索においてもバラモン教より先行して教理体系(論蔵=アビダルマ)を作り上げた。

仏教は、僧侶の生活規定である律を持ったが、在俗信者のそれは持たなかった。この点においても、アーリヤ族全体の生活規定として『マヌ法典』などの種々のダルマ文献を制作したバラモン教とは異なる。

このように、古代インドに集成された文献群は、宗教思想の変遷に密着して編纂されたものである。1作品についても同様で、あくまで宗教的意図の下に著わされていることを指摘しておかねばならない。パーニニ文法でさえ、現実の不安定な言葉から成る讃歌を、音素という永遠不滅の要素に還元して、讃歌の正確な伝承を保証するために制作されたものである。科学的真理の解明を目的とする近代文献学との違いがそこにあり、たまたま文法の場合には両者の目標はほぼ重なったのであるが、近隣領域の語源論においては、すでに記述は神学的思弁と渾然として、科学的記述とは乖離するところが多い。また仏教のアビダルマは、心理分析において現代心理学に優る精密さを持つ部分もあるが、分析の視点もそこから導かれる体系も、宗教目的に添ったものである。

これらの文献は科学的視点と同時に、宗教的見地や文学的見地からも評価されなければならないであろう。

